

保護者の皆さま、こんにちは。お久しぶりです。いかがお過ごしでしょうか。寒さも本番になってきましたね。

今日は『コロナ禍における子どもの言語コミュニケーション能力への影響』と『日本人と自信』についてお送り致します。よろしければ読んでみて下さい。

一、うれしい
二、楽しい
三、しあわせ
四、愛してる
五、大好き
六、ありがとう
七、ツイてる



「コロナ禍における子どもの言語コミュニケーション能力への影響」

先日、とある行政の子育て包括連絡会議に参加したときの話です。会議に参加していたある職員(先生)が、「最近、交流サロンに来る子(2~3歳)の発達が保育園の子と比べるとゆっくりな気がする。これはもしかしたらコロナ禍において家にいる機会が多く、家族以外の人とあまり関わる機会がないからではないか」とおっしゃっていました。わたしは年間を通して、千数百人の親子の様子を見させていただき、立ち話程度ですが軽い相談に応じているのですが、昔に比べ、2歳代のことばの緩やかさは割と多くなってきたように思います。ただし、これはそもそも発達障がいなどが増えているため、コロナ禍による影響だけではないように思いますが、確かにもしかすると人からのことばかけや人と接する機会の減少が、こどもの言語コミュニケーションの緩やかさを生んでいるのかもしれないかもしれません。だからコロナを気にしないで家を出るとまではもちろん言いませんが、こうした影響があるかもしれないという事は、頭の片隅に置いておくべきだと思うのです。事実、人間の言語機能は主に大人からことばのシャワーを浴びなければ、ことばが出ないようにできていることは確かです。オオカミに育てられたアマラとカマラは、小さいころ人間のことば(言語)を聞く環境にありませんでしたから、その後、専門家によってことばのトレーニングが行われたものの、そのかきもなくほとんどことばが出ないまま生涯を閉じてしまいました。

「日本人と自信」

わたしは親が育児や家事のできていないところや反省点を探すよりも、何とか家事や育児のできているところ、今ある幸せに目を向け、自分の力と今ある幸福を再確認してほしく、先日、児童館において保護者向けの簡単なグループワークを行いました。しかしなんと、自分のできているところが全然出てこなく正直とても驚きました。しかしそのわりに不安や不満は出るわ出るわ、まるで打ち出の小槌かのようにわんさか出てきました。わたしは相談業を営んでいるので、不安や不満が出てくることはとても自然なこと、だめという訳ではもちろんありません。しかし、自分も時としてそうですが、“なぜ人間は自分みずから気分が悪くなるような考えをするのか？”相田みつをさんの詩ではありませんが、「自分の気持ちはいつも自分で決めている」ということばが頭をよぎり、これは一体全体なにが起きているのか考えざるを得ませんでした。そこで出た私なりの答えはこうです。わたしたち日本人は小さいころから親や先生と呼ばれる大人たちから「～してはいけない」と言い聞かせられてきました。これはときに必要ですが、基本的には否定的かつネガティブな声の掛け方です。そして、できているところよりもできていないところに目が向き、よりよくなるために今の状態・状況がまるで足りないかのような言葉かけ(こうしよう、ああしよう)を私たちは多くの大人(主に親)から享受してきました。これだともうお気づきの通り、自分の思考もできているところより、できていないところに目が向き、今の幸せや満ち足りている様子に気づかないまま、日々欲求不満を抱えながら生きていくことになるのです。確かにこの欲求不満と言う状態は、人間を高みに連れて行ってくれる強力な足がかりの一つではあるのですが、個人的な見解を含め、日本人はもうすこし自分の力や今足りていることに目を向け、自信や幸福を感じる時があっても良いのではないかと、思うのです。知らずうちに私たちは親からの影響を大人になっても受けているのですね。